

2011年訪問活動概略

1月8日

(「震災被災者とボランティアの集い」のため訪問活動は行わず)

1月22日

・70代女性、一人暮らし。中央区で半壊。震災時から一人暮らし。ケガもなく助かった。この復興住宅へ入居して10年以上で、近隣とのコミュニケーションに努め、玄関前の通路でよく話しているが、それを向かいの棟の住民から覗かれているように思われる、と苦情を言われたこともある。1年半ほど前に近所の方が飛び降り自殺したときのことを話してくれた。

・60代女性、一人暮らし。中央区で半壊。身体が不自由で、あまり働くことができず、住居の確保に難儀した。この復興住宅に入居して3年目。年金は増えないのに家賃が上がってのが不安。ガスはいっさい使用しない。私たちの訪問を、早くから玄関前に出て待っていてくださった。

・80代女性、一人暮らし。灘区で半壊。地震の時、猫が知らせてくれたのか、布団をかぶったところ揺れがきて、戸棚が倒れてきたが助かった。避難所に入らず、一時身を寄せた身内の家も居心地悪く、程なく半壊のアパートに戻る。3年前、この復興住宅に入居するまで住み続けたその家は今も残っている。ここに引っ越してくるとき、タンスや水屋(食器棚)、大きな冷蔵庫などは捨てたため、ほんとうに生活上必要最低限のものだけしかない。

・70代男性、一人暮らし。中央区で半壊。経営していた店も被災したが、半壊の家に何とか住んだ。当たった仮設住宅(北区)があまりにも寒く住めなかった。この復興住宅に入居して10年以上だが、仲間を募って一人暮らしの高齢者を訪ねたり、近くの中学生に非常用水の使い方を教えたり、また遠方の中高生と被災者とが交流を持つ仲介をしたりといった活動をしている。

2月12日

・70代男性、一人暮らし。東灘区で全壊。1階の店舗では商品の自動車部品が散乱、2階にいた自分は何とか脱出したが「何もかもなくなった、グシャグシャ」。避難所に行ったら、仕切っている人が支援物資を公平に分配せず、その人間性に不信を覚えた。国道沿いだったので、食糧や支援物資を分けてもらうなど、通る人に助けられた。風呂屋がくみ上げている井戸から水をもらった。周囲で生き埋めになった人が多かったが、心臓が当時から悪く、助けてあげることができなかった。被災時でも一人暮らしで、高齢者でもなかったため優先されず、この復興住宅に入るまで11回申し込んだ。ボランティア参加者みんなでお部屋に上げていただいて、2時間にわたるお話し伺い。

・90代女性、一人暮らし。中央区で被災。震災の前年に夫を亡くした。震災時まで中央区で一杯飲み屋をしていた。息子の嫁や孫が時々訪ねて来てくれ、この復興住宅の申し込みも嫁がしてくれた。食事は1日1~2回来てくれるヘルパーにしてもらっている。月に1回往診を受けている。寒いからと、玄関の中に入れていただいてのお話し伺い。

・80代女性、弟(70代)と2人暮らし。灘区で全壊。近くの小学校に避難したが、情報が入ってこないのが高校の避難所へ。ポートアイランドの仮設住宅ではネズミがたいへんだった。この復興住宅へは同じ仮設住宅で過ごした人も一緒だったが、一人一人減っているので寂しい。

・70代、一人暮らし。中央区で全壊。地震の時は仕事に行っていた。近くの中学に避難した後仮設住宅で4年4ヶ月過ごし、この復興住宅へ。転倒して鎖骨を折っている。

・50代女性、70代夫と2人暮らし。灘区で被災。一旦尼崎に家を借りたが、灘区内の仮設住宅で長く過ごした後、この復興住宅へ。震災時、軽いケガで済んだと思ったが、脊髄圧迫と判り、松葉杖1本が必要に。仮設住宅で知り合った今の夫と再婚してからは、うまくいっている。

・60代女性、70代夫と2人暮らし。長田区で全壊。灘区の実家は水道関係の仕事をしていて、商売道具が、すぐ後ろにまで迫っていた火を防いだり、近くの川から生活用水を確保するなどで役立った。灘区で家を借りたが、近隣の酒造工場の熱気で暑く、間もなく引っ越し、この復興住宅へは早くに入居。夫(70代)は糖尿病で入退院を繰り返し、訪問時は人工透析から帰ってきて寝ていた。

・男性。風邪とのことで、安否確認程度の短時間のお話し伺いに。

・70代夫婦2人暮らし。中央区で被災。尼崎に避難した後、この復興住宅へ。仮設住宅には当たらなかった。2人の年金で暮らす。風呂の据え付けの仕事をしていた夫は、震災後忙しさのあまり脳梗塞を患う。毎日笑顔でいたいという奥さんはカラオケ好きで、本やテレビで覚えた運動をしたりしている。

2月26日

・80代男性、一人暮らし。中央区で全壊。ポートアイランドの仮設住宅で3年間過ごしたあと、この復興住宅へ。交通事故で妻を亡くしてから50年間一人暮らしなので慣れている。この4月からまた家賃が上がるので、今後が少し心配。脚に痛みがあり風呂に入るのが大変。交通費が面倒なものの、病院へは一人で行けるので、今のところはまだ幸せな方。

・80代女性。須磨区で全焼。自分は外へ避難できて無事だったが、地震後間もなく家はきれいに焼けてしまった。

・90代男性、一人暮らし。東灘区で全壊。ポートアイランドの仮設住宅を経てこの復興住宅へ。家賃が上がっていくのが困る。中国南部～台湾に兵隊に行ったこともあり、戦後神戸に来て若い頃から長く配管工をしていた。病気は特にしたことがない。脚がやや不自由で、時間をかけて出てこられ、棒に掴まりながら玄関口でお話し伺いに応じてくださった。何度も危ない目に遭っているが、外出には自転車をよく使う。8万円もした補聴器のボリュームを上げて使っていて、時々ピーツという雑音が。部屋はかなり綺麗にしている様子。普段話し相手がほとんどなく「早く死にたい」と思うこともあるが、時折近所の人が話しに来てくれる。

・70代?女性、50代?男性。インターホン越しに女性の声が出てからしばらくして男性がドアを開け「母は今トイレに…」とのことだったが、安否確認程度のお話を伺う。

3月12日

(東日本大震災の翌日であったため、話したくないとのことで、安否確認若干。)

3月26日

・80代女性、夫婦2人暮らし。中央区で半壊。電気は1月で復旧したが、水道・ガスの復旧には2月ほどかかった。それまでは公共施設のトイレを利用したり、水くみが重労働だったりした。ガスが復旧しても風呂が壊れていたのでは銭湯に。震災で東灘区の職場がつぶれ、定年まで残り

少なかったこともあって退職。竣工間もないこの復興住宅に入居するまで同所に住み続けた。現在ご自身も少し脚が悪いが、介護を受けるつもりはない。リハビリ中の夫は外出に車イスが必要。4月に家賃がまた上がるのが目下の心配事。月1回の清掃には出て、近所付き合いを。阪神大水害、神戸空襲、阪神淡路大震災をすべて経験。「あの年だったから乗り切れた」、「震災を思い出したら何でも辛抱できる」と。これらのうち、何度も危険な目に遭った空襲がもっとも恐かったとのことだが、東日本大震災の津波の映像で思い出したのか、少女時代に大水害で逃げたときのことをリアルに話されたりも。1時間近く玄関口でお話し伺い。

・60代男性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。ポートアイランドの仮設住宅で2～3年過ごした後この復興住宅へ。「どうもコミュニケーションが下手で、仲間ができないので、ここにも面白くない」とのことであったが、被災体験を教訓化した備えなど、1時間ほどお話を伺う。

「がんばってくださいと、被災地の方々に、神戸の被災者より伝えてください。神戸からメールを送ります」と、東日本大震災被災へのメッセージも。

・女性。「お伺いありがとうございます、具合がわるいので書くのはおことわりいたします。すみません」と支援シートに記入。

・男性。「おかげさまで元気で暮らして居ります。東北関東の皆様のことを思えば私たちはしあわせです。」と支援シートに記入。

・80代。「入院で るすです…」と支援シートに記入。

4月9日

・60代女性、中央区で全壊。親戚が住む東灘区の市営住宅までほとんど1日歩いて向かったが、そこにも住めず、その前にテントを張って5人で肩寄せ合って一晩中座っていた。その後あちこち泊まり歩く中で、夫と母を亡くした。1年後入居した仮設住宅は、冬は大変寒く、夏は格別な暑さの上に虫だらけ。そこで初めて支援物資をもらう。400世帯ほどあったが、自治会長さんがよくできた人だった。この復興住宅に入居して12年目。自治会の仕事をしていて、話し好きで、コミュニケーションには困らない。食べていけるだけの年金はあるが、収入の1/3ほどまで家賃が上がるのが不安で「家賃を上げないで」と何度も。被災時、水がいちばん不自由だったので、自分がもう少し若かったら、汲みに行けず家にいる人に届けてあげたい。東日本大震災の被災者に「がんばってくださいよ」と。

・70代男性、一人暮らし。灘区で全壊。ポートアイランドの仮設住宅で4年過ごした後この復興住宅に入居して12年目。仮設住宅でもコミュニケーションが足りないと感じていたが、この復興住宅に来てから4人もの孤独死を見た。被災以来3度も隣近所と引き離されるなど、市の施策の冷たさを感じるが、初めてのことで仕方なかったのかも。今この復興住宅にもかなりの空室があるので、東日本大震災の被災者を受け入れてあげてもいいと思いながらも、神戸の時より待遇がいいのではとも。東日本大震災の被災者にはがんばれとしか言えないのだが、原発は人災ですよね…。

・女性、一人暮らし。中央区で被災。足腰が痛いとのことで、玄関に出てくるのも時間がかかり立っているのも辛そうだったが、話すうちに表情も明るくなっていった。近所付き合いもうまくいかず、睡眠不足や高血圧で倒れたり、脚を捻挫したりして、食欲もなく、必要な通院も十分できず、最寄りのスーパーで買い物するのがやっと。身の回りのこともできなくなってきたが、他人をうちに入れたり、手伝ってもらったりするのに抵抗感が強い様子。初対面のボラン

ティアとしては、傾聴を通じて、信頼関係を築き、抵抗感をやわらげてもらえれば、訪問した甲斐があろう。

・70代女性、80代夫と2人暮らし。中央区で全壊。近くの高校に避難、仮設住宅に4年いた後この復興住宅へ。訪問時は夫の散髪をしていた。足腰が悪く、右膝は手術の予定。2カ所の病院に通っている。

・80代女性、一人暮らし。灘区で全壊。若い頃は見習い看護婦をしていて、戦中～戦後は満州に。戦後現地で結婚して一緒に帰国した夫は、この復興住宅で10年前に亡くなった。現在特に身体に悪いところはなく、ほぼ毎日大安亭にお茶を飲みに通っている。時代の流れに逆らわず生活しているとのこと。

・80代女性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。島根県に5年ほどいた後、3～5回の抽選で当たってこの復興住宅へ。胃を全摘出していて、少量のそうめんしか食べられない。外出も困難なのに地域の役員を12年続けてきた。玄関先のつぼみを膨らませた鉢植えの話題でなごむ。

・40代男性。中央区で全壊。妻、不妊治療のおかげでようやく授かった男女の双子と暮らす。訪問時は、この復興住宅で生まれ育っている、子どもの友達が大勢遊びに来ていて賑やかな様子。運送業で夜の仕事だが、休みの前ということでお話し伺いに応じてくださった。被災後被害がなかった垂水区の実家に半年身を寄せてから、仮設住宅に移り、この復興住宅へ。今特に困っていることはない。震災時に撮影していたビデオをいどこに貸したら紛失されてしまった。子どもに阪神淡路大震災のことを話しても実感がわからないようだ。

4月23日

・60代女性、一人暮らし。一部損壊のため公的支援は受けられず。子どもが成人した後、夫と別れた。3年前まで病院に勤めていたが、待遇が悪く、精神的苦痛もあって辞めた。労働条件・待遇は年々悪化している。東日本大震災の被災者には、神戸では津波はなかったが、被災した人は我々と同じと思う、としながらも、過剰な支援がかえって働く意欲を削ぐ「毒」になるのではとの厳しい見方も。

・80代女性、70代夫と夫婦2人暮らし。中央区で全壊。避難所暮らしはあまりせず、宮崎県営住宅を経て、西区の仮設住宅で2年ほど過ごす。友人もでき、気が休まった頃にこの復興住宅へ。今は腰痛でままならないが、少し若い頃は、この階下で盆踊りの練習をして神戸まつりに参加していた。同じ仮設住宅にいた者同士でここに入居したかった。4月から家賃が徐々に上がる。訪問時、夫は風邪とのことだったが、階下の花の世話を一人でしているとのこと。

・60代男性、夫婦2人暮らし。長田区で一部損壊。地震のとき、寝ていたところにグーという音がして、だんだん音が大きくなり、2～3分後に縦揺れがきた。背中に本棚が倒れてきて、奥さんに助けられた。芦屋で経営していた雑貨店が入っていたビルが全壊したが、住民票を置いていなかったため義捐金などは出ず。商品などを取り出して仮設店舗で営業した。行政は冷たかった。6年前に仕事を辞めた。人間が信じられなくなり、ストレスから網膜剥離になり、一時は目が見えなくなった。東日本大震災の被災者には、頑張るとはいえない、人の気持ちと絆を考えて、相手のことを大切にしてほしいと。

・60代男性、一人暮らし。長田区で全壊。近くの小学校在りだったので、須磨区の体育館に避難し、六甲アイランドの仮設住宅へ。震災のストレスで脳梗塞に。7回倒れたが、意識がなくなり全身が動かなくなることも2回あった。少しろれつが回らないので喋りにくい。今は

病院が通いの日々。タバコと酒はやめていて、そのおかげで少し不自由ながら生活できている。右手が少し不自由で字が書きにくい。震災後はトレーラーに乗って全国を走っていた。後にタクシー運転手を10年。当時は知らなかったが、この復興住宅に同僚が住んでいて、まだ仕事を続けているようだ。東日本大震災の被災者には、頑張れとよく言うがどうしようもない、頑張れと言えない、と。

・60代男性、夫婦2人暮らし。長田区で全壊。全壊した文化住宅からは自力で脱出した。近所の人を数人助けたが、新聞配達中の方が、倒れた家の下敷きになって逃げられず、そのまま焼死したのが忘れられない。娘の知り合いも亡くなった。近くの小学校に避難、現在介護職に就いている娘とともに避難者を世話するボランティアをしていた。ポートアイランドの仮設住宅を経てこの復興住宅へ。近所つきあいはほとんどない。この住宅で清掃活動をしていたら「お金をもらっているのでは？」と言われたので辞めた。現在は夫婦で大学の清掃の仕事に行っている。安くていいと、昼食を学生食堂で食べることも。お金の困る、ため息ばかりつく、国民年金だけでは食べていけない。東日本大震災の時は、震度2で、蛍光灯のヒモが揺れたぐらいだが、阪神淡路大震災を思い出したようだ。

- ・70代？女性。「ちょっとしんどいので…」と、インターホンで簡単に安否・近況を確認。
- ・「何も話したく有りません。体も健康ではありません。ごくろう様です。」と自ら支援シートに記入。

5月14日

- ・20代男性、祖母(70代)と2人暮らし。祖母は元気で出かけているとのことであった。快くお話し伺いに応じてくれたが、阪神淡路大震災の時は幼かったため、何も覚えていない。
- ・80代女性。腰が痛くて立ってられないとのことで、「お大事に」と最後に言って、短時間でのお話し伺いに。
- ・中央区で全壊。家から出てきたところに声をかけたが、病院へ注射に行くとのことで、エレベーターに乗るまで短時間のお話し伺いに。

5月28日

- ・60代男性、一人暮らし、兵庫区で被災。居宅は傾いたが、自分がいた1階の上に、2階が落ちてこなかったため、怪我もせず助かった。震災の数年前から、脳梗塞で半身不随になった、寝たきりの同居人女性の介護をしていたが、避難した近くの公園でも、近所の方が助けてくれ、世間にはこんないい人がいると思った。この復興住宅に入居してからも介護を続け、一時はストレスから1日に1升の酒を飲んで紛らわしたことも。4年前、同居人が亡くなったときには落ち込んだ。九州出身で、6歳で両親と離れ、孤児院で少年時代を送ったこともあり、たくさんの人のお世話になってきた恩返しにと、介護を引き受けたが、後は自分の人生を全うするだけ。予告チラシを見て気に入ったと、訪問を心待ちにされ、室内に入れていただいて、1時間あまりのお話し伺いに。
- ・60代男性、一人暮らし、中央区で半壊。両親宅は全壊で、父は、天井の梁が落ちてきて即死に近い状態だったが、近所の人助けもあって、いち早く病院に運ばれたため、丁寧に扱ってもらえたのを感謝している。この復興住宅に入居して10年あまり。母(90代)は老人ホームにおり、時々様子を見に行っている。昨年脳梗塞で倒れ、1ヶ月ほど入院したが、倒れたのが12月28日

で、幸運にもまだ病院が開いていたので自分には運がある。母のためには死ねないと、倒れたことはまだ言っていない。糖尿病を患っており、コンビニ弁当ばかりだった食生活を見直し、野菜をきちんと摂り、酢で味付けをするなどの工夫をし、適度な運動も心がけている。母が倒れたため59歳で退職し、60歳から年金をもらい始めたので、収入が少ないところに、入院費用や薬代が高く、生活は厳しい。テレビを地デジ対応にする費用も出てこないほど。

・50代女性、一人暮らし、長田区で被災。被害はほとんどなかったが、夫と別れ、子どもも自立したため、3年前にこの復興住宅へ。知り合いの高齢者が話を聞いて欲しいとよく訪ねてくる。ヘルパー養成の学校に通ったこともある。ガンの治療を11年続けている。手術もしたが身体がしんどい。「気で生きている」。

・40代男性、一人暮らし、灘区で全壊。近くの小学校に半年間避難、4年間の仮設住宅生活を経てこの復興住宅へ。この復興住宅に移ってよかった。糖尿病を患っており、週1回ヘルパーに来てもらっている。障碍のためか話し辛そうなか、お話し伺いに応じてくださった。東日本大震災に関しては津波の怖さが印象に。

・70代女性、兵庫区で被災。とくに被害はなく、水道・ガスも止まらなかった。仮設住宅には行かず、この復興住宅に入居して10年あまり。ここの住み心地は悪くない。息子と同居。亡き夫は外国航路の船員だった。自分は年金をもらっているので、贅沢しなければ生活に問題はない。

・60代男性、灘区で全壊。「ボランティア ご苦労様です。今はなにも話す事はありません。」と支援シートに自ら記入。

6月11日

・60代男性、一人暮らし。中央区で全壊。被災当初は屋内にいるのが恐ろしく、車の中や公園で3ヶ月過ごした。ポートアイランドの仮設住宅にいた頃に離婚、この復興住宅へ入居して13年目。仮設住宅ではいやなことが多かった。今もいやなことはあるが相手にしない。昔はリサイクルや解体などの仕事をしていた。いくつも病気をし、今も椎間板ヘルニアで腰が痛い。酒やタバコは止めている。料理も上手になって、近所の90代女性につくってあげたことも。今一番楽しいことは喫茶店に行くこと。オーナーが大切にしてくれるので1日1回は大安亭まで通っている。神戸ルミナリエは、一部地域だけで盛り上がっているが、全体で盛り上がるようなことをすべき。神戸と同じく、今の東北の被災地でも人間が復興していない。

・80代女性、一人暮らし。北区で一部損壊。前夜から泊まり込んでいた建設会社の倉庫で被災、資材が散乱したが、脚立を使って2階から出入りした。同区内の自宅では水道管が破裂して水浸しになったため、被災時にいた倉庫でしばらく生活した。こちらもガス・水道は止まったが、敷地内の井戸が飲み水にできたので、それほど不自由はしなかった。自宅は市営住宅なので、市に修理を依頼したが、何もしてくれず、自分で業者に頼んで修理した。その住宅が建て替えになるので、2年半余り前にこの復興住宅へ。当初3年で戻れると聞いていたが、建て替えは進んでおらず、いつ戻れるか解らない。本来据え置かれるはずの家賃も上がっている。永年いろいろな方のお世話をしてきた。私たちの訪問活動でもお世話になっている住民の方が、自室で倒れかけたところを、これまで何度か助けてきたが、救急車で運ばれたのを見て以来、ずっと心配していた。

・70代男性、一人暮らし。兵庫区で全壊。ポートアイランドの仮設住宅で4年過ごし、兵庫区内

の県営住宅に1年住んだ後、この復興住宅へ。5年前に妻を亡くす。建築関係の仕事を退職した後、定時制高校に入学、3年修了。クラスメートが今も話し相手に。カラオケ、麻雀、グランドボール、将棋などが趣味で、身体はとくに悪いところはなく、困ったことはない。

・60代女性、中央区で全壊。この復興住宅へ入居して13年目。帰宅されたばかりのところだったが、「今はまだ健康です。この先体が悪くなった時が心配です。なやんでもしかたがないので今はがんばって生きて行きます。ありがとうございます。」と自ら記入された支援シートをもとにお話し伺い。

6月25日

・60代女性、兵庫区で全壊。この復興住宅に入居して12年。「12年前の入居当時と、そんなに変わらないと思います。普通に生活出来て幸いです。ボランティアの方々ありがとうございます」と、自身で支援シートに記入。

・60代女性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。家族は無事であった。あちこちの避難所を4カ月ほど転々とした後、ようやく北区の仮設住宅へ入居。この復興住宅へは12年前に入居。仮設住宅では、ほんとうに不自由したが、現在の生活では特に不自由していない。前年に母を亡く、子ども達も既に独立し、3人の孫にも恵まれた。

・80代男性、中央区で被災。仮設住宅はポートアイランド。この復興住宅へ入居して13年。鼻にチューブを付けており、心臓が悪いということで、しんどそうだったので、お礼を言い、早々に引き揚げた。

・80代女性、灘区で被災。近くの小学校へと避難したが、西区の仮設住宅に入るのに4ヶ月かかった。仮設住宅には1999年までいた。現在は息子と2人暮らし。娘たちは孫の世話に忙しく、以前ほど会いに来てくれなくなった。スーパーへはよく買い物にと行く。現在の近所の人とは、あまり付き合いがないが、友人が2~3人いるので寂しくはない。心臓が弱く、時々病院へ通っていたり、家賃が上がったりということはあるが、概ね幸福な生活。東日本大震災の被災者のことが心配。

・70代男性、中央区で全壊。入居寸前の新居は全壊し、搬入済みの家財もろとも失った。被災時は友人宅にいて無事。そこへしばらく身を寄せていたが、程なく、この復興住宅が抽選で当たった。若い頃に北海道より上京し、公務員をしていたが、ケンカ速さのため早くに退職し、それから職を転々として、被災時は港で船大工をしていた。現在は年金生活で、今年4月に家賃が上がり、生活が苦しくなった。飲みすぎで胃がやや悪いのを除けば健康。お酒は減らしたいが、なかなか減らせない。友人が風呂場で倒れ亡くなるなど、普段の人づきあいが希薄だったので、ボランティアの訪問をたいへん喜んでくれ、厚くもてなしてくれた。自分で料理をしたりと多趣味な面も。

・男性。元気にしているが、都合のため出られないと、インターホン越しに返答。

・60代女性、東灘で被災。娘と2人とも働いており、特に生活に不自由はしていない。

・女性。来ていただけて有難いと、ドアより少し顔を見せて応答。

7月9日

・80代女性、中央区で被災。自宅は大した被害はなく、そのまま住める状態だったが、近くの小学校に避難。7回申し込んで、この復興住宅へ。入居8年目。いつも友人や姪がきてくれる。

足がやや不自由とのことで、インターホンを鳴らして、しばらく時間が経ってから玄関に出て来られ、元気な様子でお話し伺いに応じてくださった。週1回ヘルパーにきてもらっているが他に身体の具合が悪いところはない。節電のため、エアコンを使わないようにしていたら、気分が悪くなったことも。

・40代男性。結婚前の妻が灘区で被災していたが、自分は阪神淡路大震災のことは解らない。訪問時は夜勤明けで寝ていたところを、インターホンで起こされたとのことで、たいへん眠そうな様子だったので、手短にお話しを伺った。

7月23日

・70代男性、一人暮らし。中央区で被災。この復興住宅へ入居して10年。足をはじめ身体は悪い。近くのスーパーへ行って、食事は自分で作っている。(理由・事情は解らないが)後2年半でこの部屋を出なければならぬと、神戸市から言われているとのこと。

・男性。インターホン越しに「自分は大丈夫です」との返答。障害者で、家族の留守中に誰が来てもドアを開けないように言われているとのこと。

・女性。インターホン越しに「体調崩して休んでいる」とのこと。

・女性。インターホン越しに、多忙とのこと。(2軒)

・投函した予告チラシの「ご都合が悪いときは、どうぞお断り…」に赤線を引いて、不在の旨お知らせいただいた。

8月13日

・70代男性。一人暮らし。中央区で全壊。被災当時は母と妻との3人暮らしだったが、この復興住宅に入居する前に相次いで病気で亡くした。ポートアイランドの仮設住宅を経て、ここに入居して12年目。震災からしばらくした頃、糖尿病のため仕事を続けられなくなり、現在は生活保護で暮らす。3年前、脳梗塞で倒れたが、素早く自分で医者に連絡した甲斐があって、軽くて済んだ。足や手もリハビリの成果と努力で回復し、来てもらっていたヘルパーも不要になるほどに、自立生活している。通院や買い物のため外出して運動し、食事療法に気を遣うなど、健康維持に努めている。

・40代男性。東灘区で全壊。両親と3人で住んでいた、3階建てのマンションの1階がつぶれて2階建てのようになり、5人亡くなった。近くの公園内に建設中の施設を避難所代わりにして過ごした後、同区内の仮設住宅を経て、この復興住宅に入居して12年目。バリアフリー化された部屋だが、軽度の障害者が自立生活するには便利だが、介助する立場から不便を感じる場所が多い。訪問時は、お盆にあわせて介助施設から帰宅する母を迎えるため在宅していた。長距離トラックの運転手を20年していて、うちにいることは非常に少ない。阪神淡路大震災の時は、舞鶴で激しい揺れに遭い、やがて神戸が震源らしいことを知り、火の手が上がっているのを見るや「帰る家がなくなった」と思った。支援物資の輸送も手がけ、中越地震の被災地にも行ったことがある。8日に東日本大震災の被災地、宮城県女川町に行ったら、津波で流されていて「何もあらへん」、「神戸よりひどい」。3月11日の東日本大震災の時はポートアイランドにいたが、人工島で地盤がゆるいせいか、かなり揺れた感じがした。

・70代女性、一人暮らし。中央区で全壊。震災前に夫を亡くし、子どもも1人は独立していたので、震災時は母子2人暮らしだった。近くの公園で炊き出しを手伝うなどしたが、早くに公営

住宅に入居できたので、仮設住宅には入らず。震災の時は布団の中でふるえていたが、上から落ちてきた物に足を挟まれ、動けずにいたところ、息子が引き出してくれた。何日かして挟まれていたところに変色してきて、現在も痛みが。調理師の仕事を今も続けながら、この復興住宅に入居して10年、3食しっかり食べるのが元気のもとと、一人暮らしを続けている。

・男性。今年家族を亡くし初盆を迎えた。悲しみで話しをするよう気にならない。

8月27日

・70代女性、東灘区で全焼。震災時は、朝5時からの仕事で、六甲アイランドにある勤め先にいた。行政が認めた避難所でなかったため、避難先を次々と移動させられた。同じアパートにいた身体障害者の住人と一緒に移動したことも。やつのことで垂水区の仮設住宅へ。被災時に気づかないうちに強打していた後遺症であろうか、背骨を痛め(脊椎狭窄症)、通院を続けており、今日も病院に行ってきた。思い物が持てないので、買い物などのために、週1回ヘルパーに来てもらっている。初め弱々しかった声も、お話し伺いの中で次第に元気に。

・女性。「(東日本大震災以来、阪神淡路大震災のことを)思い出すのが辛く、話したくない」と、インターホン越しに。今とくに困っていることはないとのことだが、健康状態を尋ねるとやや声の調子が下がった。

・「忙しいので…」とインターホンを通じて応答するも、安否確認程度のお話ししか伺えず。

(3軒)

・支援シートに「お断りします」と大書して貼り付けた玄関ドアは、風通しのため少し開いていた。

9月10日

・80代男性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。大阪の妹宅に一時身を寄せたが、同区内の民間アパートで8年過ごした後、この復興住宅へ。普段の買い物は奥さんが。警察に40年勤め、主に交通違反者の処分に関する仕事をしてきた。7年前、顔の筋肉が化膿し、手首の筋肉を移植した。そのため、話すのもたいへんな中、お話し伺いに応じてくださった。

・80代・50代女性、宝塚市で被災。タンスが倒れてきて頭に当たり、14針縫うケガを負い、怖い思いをした。当時居住していた県営住宅は倒壊せず、ガス・水道・電気もすぐに復旧し、仮設住宅にも入らなかったのは、不幸中の幸いだった。職場にも復職でき、生活には困らず、今に至っている。(自身で支援シートに記入)

・40代女性。震災時は北区。高校生の子どもが2人おり、上の子はこの日も自宅で受験勉強中。同じ復興住宅に父親がいるため、何度も申し込んで、3年前に入居。

・女性。2週間前、予告チラシを投函した際にお目にかかったところ、フラッシュバックであろうか、東日本大震災以来、血圧が上下してしんどいとのことだった。今回、体調を尋ねたら、「前よりは少し元気になった。薬たくさん飲んだから。出がけなあかんし…」と、出がけにお話し伺い。

・女性。東灘区で全壊。震災時は仕事の関係で奈良にいたが、かなり揺れた。テレビを観て神戸がたいへんなことになっていることを知り、在宅していた息子を心配した。ポートアイランドの仮設住宅を経てこの復興住宅に入居して13年目。膝が悪く歩くのがたいへんと、インターホン越しにお話し伺い。

・80代女性、一人暮らし。灘区で全壊。文化住宅の2階にいたので、自分は大丈夫だったが、階下の住人は亡くなった。身内のもとや近くの高校の避難所に身を寄せた後、ポートアイランドの仮設住宅で4年過ごし、この復興住宅に入居して13年目。夫は、阪神淡路大震災の前年に亡くなったが、震災を知らず幸せだった。震災の時まで、Yシャツの縫製の仕事をしていて、7人ぐらいの女性を雇用して、百貨店などに納めていた。息子が月に1回は訪ねてきてくれる。今はあまり出歩かないが、友人がたくさん集まって来てくれるので淋しくない。

・70代女性、60代夫と2人暮らし。灘区で一部損壊。実家で母を看ながら5年過ごしたが、壊れたキッチンで家事をするのがたいへんだった。今のご主人と再婚し、県営住宅に入居したが、家賃がたいへんだったので、何度も申し込んで、4年前にこの復興住宅へ。趣味も多彩で、フラワーアレンジメントは、腕を活かして教えたり、ボランティアしたりしている。刺繍の作品は玄関周りにも飾っている。この他にも、子育て支援の有償ボランティアもしており、児童館に連れて行っている。ご主人は最近安定した仕事に就き、定年まであと2年勤められるとのことだが、訪問時は、お酒を飲んで休日を過ごしているとのことだった。

9月24日

・70代女性、70代夫と2人暮らし。灘区で全壊。近くの原っぱに、家にあった食料をもってきて、テントを張って、5家族で生活した。娘婿が迎えに来てくれたので、自分一人で、いったん西区に行ったが、夫が心配で、テントに戻った。3ヶ月ほどしたところ、神戸市から立ち退きを要求されたので「どうしたらいいのか?」と詰め寄った。おかげで東灘区の仮設住宅に入り、2年過ごした。去年、腎臓を患うまでは、この復興住宅の自治会でお世話をしたり、東灘区にボランティアに行ったりしていた。

・60代男性、一人暮らし。尼崎市で全壊。罹災証明をもらうのが遅くなり、義捐金などは受け取れず、自力でアパートを探して入居。ついで西宮の市営住宅で10年過ごしたが、呼吸器系の内部障害のため、酸素が手放せなくなり、エレベーターがなく4階まで階段で上るのもたいへんになったため、この復興住宅へ。近隣とコミュニケーションが取りにくく、大気汚染や騒音で身体の調子がいつそう悪化しないか心配。2週間前「予告チラシ」を投函してから連絡を取ってこられ、訪問当日も私たちを出迎えてくださるなど、訪問を心待ちにしてくださった。

・70代女性、一人暮らし。中央区で一部損壊。高齢者向けの募集でこの復興住宅に入居したのは昨年。40代で離婚して以来、最近まで、百貨店の販売員などの仕事を続けてきた。震災直後、ライフラインが止まり余震の不安もあって、近くの公園で野宿のような避難生活をしていたところへ、北摂から娘夫婦が迎えに来て、一緒に公園のベンチで夜明かしした後、荷物を運んだり、片付けなどをしてくれたりした。近年、包丁で左人差し指の先を切ったところ、神経を傷つけていて、左手にしびれが来るようになってしまった。

・70代女性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。当時働いていた夫が仕事に行けるような場所にある仮設住宅を申し込んでも当たらず、収入もあったため、市営住宅にも当たらなかった。灘区のマンションで5年過ごした後、この復興住宅へ入居。ここへ来てから夫が脳出血で倒れたが、奥さんがいたおかげで大事に至らず、今ではリハビリのおかげで歩けるようになった。

・70代女性、80代夫と2人暮らし。長く尼崎で総菜店を営んできたが、再開発に絡んで借金を背負わされ苦勞した。先に父が別棟に入居していたことから、自身も7年前にこの復興住宅へ。肺を患っている夫の介護をしながら、1日2〜3時間、清掃の仕事をするほか、高齢者が多いこ

の復興住宅の棟の住民のための活動もしている。

・70代女性、一人暮らし。中央区で全壊。同区内の仮設住宅を経てこの復興住宅に入居して13年目。ここに来てしばらくして母を看取ったが、100歳を超えるまで世話ができてよかった。読書が趣味で、同好の友人も多いと、楽しそうに話された。

・20代男性。東灘区で半壊。被災当時は小学生だったが、震災のことは鮮明に覚えている。近くの中学や高校で避難生活を送った。この復興住宅には、一般募集で入居して3年、2人の子育て中。

・80代男性、夫婦2人暮らし。灘区で全壊。奥さんは元気だが忘れっぽくなって困っていると笑いながら、お話し伺いに応じてくださった。

10月8日

・80代男性。灘区で全壊。小学生まで長田区で過ごして灘区へ。震災後が近くの電気会社に避難、この復興住宅には竣工後間もなく入居。40年前に奥さんを亡くし、叱るのではなく温もりをもって接するように心がけて、2人の息子さんを男手で育て上げた。私たちの訪問に先だって、皆お互いに優しくかった、気遣いあった、若干の不正は許しあうべきなど、被災経験を通じて伝えたいことをまとめて書き留めて準備されていた。四国の高校生が10人ほど来てくれ、今も交流があることを、掲載された新聞記事や一緒に撮った写真を見せながら、うれしそうに語った。

・80代女性、一人暮らし。中央区で被災。終戦後間もない頃、兵庫県庁で復員・引揚者に関する事務の仕事に就いていた伝手で入居して以来、住み続けてきた住宅は、震災で屋根が損壊し、床や絨毯が水浸しになり、肺を患うに至った。年金生活では築百年近い住宅を修理する費用を捻出できず断念。この復興住宅に入居して13年目。一人で暮らすには十分な広さだ。最近足が悪いとのことだったが、インターホンで来訪の旨を伝えたと、階下に降りてきて、1時間ほどにわたって、震災時や近況にとどまらず、さまざまお話し伺いに応じてくださった。

・10代女性。。母・祖母ら家族5人暮らし。被害はなかったが、幼いときのことなので、震災のことは覚えていないし、親からも教わっていない。この復興住宅へ入居して11年近くに友人はいるが、あまり接触はない。人見知りする、人付き合いが苦手とのことだが、学校から足が遠のいていき、アルバイトの応募も躊躇していることなどを、話してくれた。自身や子どもの年齢に近いボランティア初参加者が、一緒にボランティアしませんかと勧める場面も。

・20代女性。垂水区で被災。被害はなかったが、小さいときのことなので、震災のことは覚えていない。この復興住宅に入居して5年。2人の娘さんと出かけるころだったため、短時間のお話し伺いに。

・30代男性。明石市で被災。子どもの時のことなので、震災のことはよく覚えていない。この復興住宅に入居して5年。3人の子育て中。

・女性。インターホン越しに「病気で寝ている」とのこと。

10月22日

・50代男性、一人暮らし。東灘区で全壊。文化住宅の2階にいて、ケガはなかった。同じ建物の住人を皆で助け出し、負傷者はいたが死者はいなかった。若い頃は、電器店、自転車店、菓子店など、さまざまな仕事に。きつい仕事も多く、無理がたたったのか、近年はさまざまな病気

になり、養生に努めている。糖尿病のため白内障が進み、両眼とも手術したが、この復興住宅の人の間でも評判のいい病院にしたおかげで、よく見えるようになった。障害者の外出補助のボランティアをこともあるが、体調を考慮してやめた。仕事で身につけた技術や道具類を活用して、自転車の修理や組立、エアコンなどの電器製品の修理を、ボランティアでしている。

・70代男性、一人暮らし。灘区で被災。被害は特になかったが、補償もないまま住んでいた家が解体された。そうしたところから「人間は土壇場で知らんぷりする」と、人間不信をおぼえた。九州から神戸に出てきて、長く製鉄会社で働き、今はその年金で生活しているが、数年前に減額され、楽ではなくなった。以後、政治家への不信を強めた。心臓の手術をしたばかりで、体力も弱っている上に脚も悪く「もうあまり生きられない」とのことであったが、穏やかな表情をしていた。

・60代男性、一人暮らし。東灘区で全壊。避難所や仮設住宅には入らず、勤務先の社宅で3ヶ月ほど過ごした後、民間マンションへ入居するなど、被災後の住居は独力で確保した。この復興住宅へ入居した際、当初は旧公団(UK)の棟であったが、家賃が上がる一方、退職して年金暮らしとなり、収入が少なくなったことから、県営住宅であるこの棟に移った。2度目の手術を受けて成功し、今に至っている。

・80代女性、90代夫と2人暮らし。兵庫区で全壊。被災後しばらく壊れた家で過ごし、「お墓が近く、火の玉をよく見た」と、当時の恐怖を語った。この間、転んで脚が悪く弱っているとのことで、歩行器を押して歩いている。インターホンで来意を伝え、玄関前に来ていただいております。

- ・「(本人は)入院している」と、留守番の方がインターホンを通じて返答。
- ・女性。「来客中で…」と、インターホンを通じて返答。(2軒)
- ・男性「被災していないので…」と、インターホンを通じて返答。
- ・訪問は断られたが「食事と運動で健康です」と、自身で支援シートに記入。
- ・「今とくに困っていることはない」と、インターホンを通じて返答。

11月12日

・70代女性。西宮市で全壊。夫が退院して1年ほどで被災。大阪へ避難しているときに夫を亡くし、被災した家の取り壊し費用を負担したままに。大阪も気に入っていたが、子どもたちがこの復興住宅へ入れるように申し込んでくれていたので、神戸にきた。明日は子どもや孫たちと墓参りに行く予定とのこと。先端医療センターのおかげで早期発見早期治療ができた。

・70代男性、一人暮らし。中央区で全壊。壊れた家にしばらく住んでいたが、取り壊すことになり、近くの学校の避難所へ行き1週間過ごす。ポートアイランドの仮設住宅で3年あまり過ごし、この復興住宅へ。ここにはずっと居られそうで安心している。一人暮らしが長いので、人が訪ねてくると緊張し、人と話していると息苦しく感じる。

・80代男性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。避難所では中心になって世話をしている人が支援物資を横流ししているのを眼にした。加古川市の仮設住宅に5年近く居た後、この復興住宅へ。自治会長をしていたとき、近隣の人に電話番号を教えたら、金を貸して欲しいとの電話が相次いで困った経験から「あまり入り込んでダメだ」と。「年寄り生きていたらあかんのか!？」と、政治への不満をもらす。階下で私たちの到着を待っておられ、そのままお話し伺いに。

・80代女性、一人暮らし。中央区で半壊。近くの学校の避難所で5ヶ月ほど過ごした。この復興

住宅へは竣工当初から入居。夫は震災前に亡くした。駅で新聞を売る仕事をしていたが、震災のために中断したのは1ヶ月間ぐらいだった。近くに住む息子さんが時折やってきて、夕食を共にしたり、泊まっていったりする。あまり病気はしておらず、不自由もない。お部屋に上がらせていただいていたのお話し伺いに。

・70代女性。中央区で全壊。神戸で自立して生きていかねばと、そば屋の仕事に。はじめはパートであったが、勤め先を変えながら仕事を覚え、商店街で自分の店を開くに至った。店内はいつも満席状態の繁盛ぶりで、最盛期には6人もの男性従業員を雇った。そうした、面白いように店が廻っていった、忙しかった頃が懐かしい。私たちが来意を告げると、歩くのに不自由を覚えるなかで、時間をかけながら玄関まで出てこられて、お話し伺いに応じてくださった。

・70代女性、東灘区で全壊。被災時は6時間生き埋め状態だった。北区の仮設住宅を経てこの復興住宅へ入居して10年以上。「入居の時も、北区の仮設住宅からここまで、ボランティアの方々が助けて下さって、本当に有り難かったです。神戸だから、はじめて、ボランティアの基礎が固まって、人々を、今たくさん助けて下さっているのに、心から有難うといいながら、神戸に住んでいて、誇らしく、感謝しながら、生きて居ます…」と、手術後の不自由な手で支援シートに記入し、リハビリに行かれたため、お話し伺いはできず。(留守宅に投函する「留守シート」に、感謝とともに、もっと暖かな言葉を添えればよかったと反省。)

・男性。「(夕食の準備で)火を使っているところなので」と、短時間で切り上げ。

・女性。若いので(震災のことは)解らない。

11月26日

・70代女性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。西区の仮設住宅を経て、この復興住宅へ入居して11年。これまで何度かの訪問で、ボランティア参加者とも親しくされ、神戸・週末ボランティアの行事にも参加されている。「何人死にましたか？」などと、「死」という言葉は、胸に刺さるので、使わないでほしい。(東日本大震災も含めて)被災者に「お元気ですか?」、「よかったですね」といった言葉をかけてくれるとうれしい。漠然と「話を聞かせてください」よりも「一緒にお話ししてくれませんか」とか、具体的に「何か教えてください」と言われた方が話しやすい…。この日の訪問では、被災者として体験を語ってきた立場から、お話し伺いに臨むボランティアへのアドバイスや意見をいただいた。

・70代男性、北区で被災。停電や断水はなかった。家が古くなったので、昨年夏、県営住宅を申し込んだところ、1回で当たって、この復興住宅へ。家賃も安く、何も言うことはない。化学関係の会社を退職し、今は年金生活。時間をもてあまし図書館に通っている。ボランティアにも関心がありそう。

・50代女性、東灘区で全壊。近くの小学校に2~3日避難した後、大阪の親戚宅のマンションで1ヶ月ほど過ごした。足腰を痛め車いす生活だが、内蔵などに悪いところはない。

・90代女性、東灘区で全壊。北区の仮設住宅で4年間過ごした後、この復興住宅へ。身体はどこも悪いところはなく、血圧も安定している。食事も掃除も自分でしている。週4回ほどゲートボール(公認ジャッジの資格も持っている)に行っており、これが元気の源のよう。

・女性。この復興住宅に入居して2年、ここで2人の子どもが生まれ、子育ての最中。インターホン越しに近況をうかがう。

・「何も云うことはありません。ごくろうさんです。」と、自ら支援シートに記入。

12月10日

・60代女性、一人暮らし。灘区で全壊。九州から神戸にやってきて半年後に、阪神淡路大震災に遭った。そのときは、身を守るために布団をかぶり、揺れがおさまってから家から脱出したものの、何が起こったか判らず、頭の中は真っ白。神戸市内の仮設住宅に申し込んだが当たらず、大阪府で3年ほど過ごす。10年前にやっと当たったこの復興住宅へ。現在は年金で生活している。食品にだけは消費税をかけないでほしい、政治家は私たち貧しい人のことをもっと考えてほしい…。

・60代女性、夫(70代)・娘(20代)と3人暮らし。東灘区で全壊。私たちが訪問したところに、買い物から帰宅、「週末ボランティアって本物？」が第一声。この3年の間に脚や胸の手術を受けた。娘さんはヘルパーで、1級の取得を目指しているが、ある利用者宅に週5回入っていたところ、近隣の建設現場から出た有害物質の影響で、身体をこわしてしまった。利用者と同じ公営住宅の住民にも多く同様の症状が出ていたという。

・30代女性、夫・娘と3人暮らし。3年前、留学生の夫とともに神戸にきて、この復興住宅へ。人と防災未来センターを見学して、阪神淡路大震災は非常に怖いと思った。祖国・ベトナムでは毎年台風に見舞われており、小さい頃、怖い思いをしたが、震災はそれを遙かにしのぐ。ここに来てから生まれた娘を保育園に預けて、スーパーの仕事に。ボランティアに教わって日本語を勉強している。夫は大学院で研究に明け暮れている。

・女性。震災は経験していない。週末は子どもがいるので、世話がたいへん。

12月24日

・80代女性、夫婦2人暮らし。灘区で全壊。被災当初は市内の息子さん(今も時折この復興住宅へ来てくれている)のもとに避難したが、程なく県外へ。仮設住宅はポートアイランドだった。夫婦ともにお元気で、夫は今も車の運転をしている。「生きている以上は人のために何かしたい」と、ボランティア活動をしたことも。夫は今も続けているという。

・60代女性、一人暮らし。東灘区で全壊。区内の公園で避難生活を送った。故郷の親戚から送ってもらった米を、炊き出しに供出して配ったりした中で、大学生のボランティアが組織だって動いてくれて助けられたりした。震災後に職を失わずに済んだことから、仕事は何より大切と、最近まで長く製造業で働いてきた。男子高校生も同じ職場にいたとのことで、身体にはきつかったのか、震災以来の負担も相まって、腰や肩を痛め、たくさんの湿布を貼っている。避難生活で行政的確な対処が行き届かず、「自助努力」を強いられた経験から、「力のない人は何年かかっても這い上がれない」と、痛切に感じた。また、「東日本大震災に比べれば、阪神淡路大震災はまだマシ」との思いも。

・男性。「都合が悪いのでお断りします」と、メモを貼り付けて外出。帰宅されたところに出会い、あいさつなど交わす。

・男性。「今日は元気がない…」とのことで、安否うかがいのみ。

・「しんどくて、もの言うのもイヤ」とのことで、安否うかがいのみ。